

千葉シニア自然大学合同研修旅行

北海道グリーン・ツーリズム体験記

厚真体験交流とアポイ岳登山

平成26年7月6日（日）～8日（火）



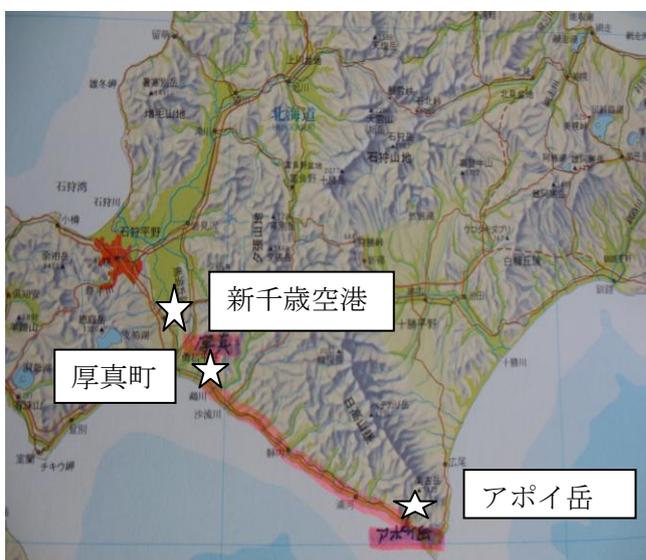
アポイ岳ジオパークビジターセンター前で記念撮影

7月6～8日の3日間、北海道厚真町の「こぶしの湯あつま」を拠点に同町が主催するグリーン・ツーリズム(体験型観光)とアポイ岳登山を楽しむ北海道研修旅行が行われた。千葉シニア自然大学の全受講生及び、房総を歩こう会のメンバーを対象に参加を呼びかけ実施された旅行で、47名(一期生8名、二期生11名、三期生18名、他3名、事務局7名)という大所帯の旅になったが、グリーン・ツーリズムを通して地元の人々と接しながら、初夏の北海道を和気あいあいと巡ってきた。見聞だけでなく触れ合いも楽しむことのできる旅であった。

心地良い旅だった。北海道の雄大な景色は訪れた一行を癒してくれ、「厚真」の漢字名に恥じない厚真町の多くの関係者の厚い真心のこもったもてなしにくつろぐことができた。又、規律を重んじ気が許せる学び仲間の思い遣りある立ち振る舞いが、大人数の団体旅行の煩わしさも気にならない程に心を和ませてくれた。この旅行は飯田洋理事長の知り合い

という縁で厚真町観光大使の肩書を持つ後藤秀美氏の勧めに応じて計画されたものだが、アドバイザー役を勤められるだけでなく同行まで申し出て頂き、この町の魅力を紹介し、地元の人との交流をセットするなど中身の濃い旅行をコンダクトされた。この旅行が自然と人との触れ合いがある、シニア自然大学ならではの旅になったことが嬉しい。

お世話になった厚真町役場の小山氏、セイコーマートの藤井氏、その他多くの厚真町の関係者にお礼を述べたい。今回の素晴らしい旅を演出してくれた人々である。又、旅行実施までの半年間、幹事の飯田耕一氏を中心にこれを支えた事務局の細密な準備があったことも書き留めておきたい。



行程図



第1日目（7月6日）

地元名士を招いてのバーベキューパーティ。火を囲んで、場が盛り上がる。



第2日目（7月7日）

アポイ岳（810m）に登る。眼下には太平洋の広大な景色が広がっていた。



第3日目（7月8日）

今が旬の厚真町特産ハスカップを摘む。北海道の野生の味か。

第1日目（7月6日 日曜日）

新千歳空港に全員集合。名馬の放牧地などを訪ねながら厚真町に向かう。宿舎到着後早速に農産物加工体験（ソーセージづくり・そば打ち）に取り組み、暮れては地元の名士を交えたジンギスカンパーティで盛り上がった。



お誘いのビラ



11時、新千歳空港に集合し、バスで厚真町に向かう。

- ・ 11:00 新千歳空港現地集合
- ・ 11:30 ノーザンホースパークで昼食と自由行動
- ・ 13:30 社台スタリオンステーション見学（不敗の名馬ディープリンパクト放牧地）
- ・ 14:30 厚真町「こぶしの湯あつま」にチェックイン
- ・ 15:00 農産物加工体験（ソーセージづくり・そば打ち）
- ・ 18:30 宿舎前庭にてバーベキューパーティ



厚真町観光大使がツアーに同行。バスの中で歓迎の挨拶をされる後藤秀美氏。



最初に立寄ったノーザンホースパーク。空港近くであり、ここで昼食をとる。



次に向かった所は、不敗の三冠馬「ディープインパクト」も余生を過ごす放牧場



見学時間は 2 時まで。運よく厩舎に戻るディープインパクトを見ることができた。



放牧されている競走馬を金網越しに見る。



役目を終え昨年死んだトウカイテイオーの真新しい墓を見かけた。



厚真町は空港から 30 分の距離にある。北海道の台地を通り抜け、街に着いた。5 千人が住む小綺麗な町だ。



3 日間お世話になる「こぶしの湯あつま」。小高い丘の上に建つ。



宿泊も可能な日帰りで楽しめる温浴施設。温泉施設、体験設備が整っており、館内は清潔で快適に過ごせた。



宿舎の入り口で町のイメージキャラクター「あつまるくん」がお出迎え。町の貴賓者として迎えられた。



「あつまるくん」と観光大使後藤氏、お世話になった藤井商工会副会長。



到着後、宿舎内にある農産物加工体験場に集合。早速そば打ち体験が始まった。



4班に分れてのそば打ち体験は、インストラクターから手本を見せてもらいながら、そば粉練りから始める。



1時間が経過。最終工程のそば切りに進む。打ちあがった蕎麦は、夜のパーティーでふるまわれた。



厚真町の主産業は農業。地元農産物の加工体験が観光の売りだ。町の公民館に移動しソーセージ作り体験を行う。



インストラクターの挨拶が終わり、ソーセージ作り体験が始まる。食材は地元産の新鮮な豚肉。



羊の腸に肉を詰めていく。丁寧な手作りソーセージが出来上がる。味が楽しみだ。



出来あがったソーセージ。バーベキューパーティの食材の一品として食味した。



夜の帳が下り、炭火で熱せられた7つの鉄板の周りを囲んだ。厚真町の名士6名も加わり賑やかな交流会が始まる。



寺坂商工会長と談笑される飯田洋理事長。瞬く間に打ち解けた雰囲気が醸し出された。



厚真名物のジンギスカン料理。鉄板で焼いておいしく食べた。夜になると冷えてくるが、火の周りは暖かい。



こちらでは厚真町役所参事が加わり、会話が弾む。参事は羊の肉を焼きながら話の輪に加わることに…



地元産のとうもろこしと旭メロンがデザートにと差し入れられた。さすがに新鮮で美味しい。



地元の人が加わっているので話題に事欠かくことはない。話は尽きない。



懇談



懇談

第2日目（7月7日 月曜日）

早朝に宿を発ちアポイ岳登山へ。頂上には立てなかったが、雄大な景色を楽しんだ。夕食後ホタル狩りへ。期待と心配が入り混じる。真っ暗闇の森に突如源氏ホタルが乱舞する光景が目飛び込んできた。皆が息を飲む。感動の声があちこちから聞こえてきた。



アポイ岳に登ると、裾野に太平洋が広がる景観を楽しむことができる。景色だけでなく希少な高山植物が楽しめ、珍しい地質を学ぶのに好適の地だ。

アポイの高山植物は、特殊な自然に育つ植物であり国の特別天然記念物に指定されている。

- ・06:30 宿舎出発 途中、名馬ハイセイコーが育った新冠の道の駅で休憩
- ・09:30 アポイ岳ジオパークビジターセンターに到着。3組に分れアポイ岳に登る
- ・16:30 ビジターセンター出発。途中、サラブレッド銀座に立寄る
- ・19:10 宿舎に帰着
- ・20:00 100年記念公園の森でホタルの乱舞を見る



9:30 アポイ岳ビジターセンターに到着。周辺はきれいに整備されており、りっぱな温泉付き山荘もある。



登山ガイド（自然観察員）3名と合流。登山についての注意を聞いて出発した。



国の特別天然記念物に指定されている高山植物群は5合目から上で見られる。



脚に自信がある第1グループから順に登山を開始。



これは熊出没注意の看板。この周辺にも現れるとか。



道沿いに設置されている熊避けの釣鐘。搦きながら登る。



立ち止まりガイドの話聞く。ここは針葉樹と広葉樹が混じる珍しい樹林帯との説明。



針広混交の樹林帯を抜け、ようやく5合目の山小屋まで上り、一服する。



正面に見えるのがアポイ岳の頂上。
あの頂きまで登る。



眼下に太平洋が望めた。写真では判らない。



携帯トイレ専用のテントブース。
環境に配慮した対策がきちんとな
されていた。



これが簡易テントブース。初めて目
にした。



ここからが本格的な登山道。滑りやす
いガレ場の急勾配の登り道が続く。



岩場の登山道を登り始める



胸突き八丁の登り。岩場を登りきると樹木がなくなり、展望が開けた。



ここまで登ったぞ！馬の背と呼ばれる尾根に立つ。南に太平洋、北に日高山脈が見える。



正面がアポイ岳の頂上。ここで昼食をとる。



馬の背のお花畑で記念写真。海と山が見渡せる絶好のポイントだ。



馬の背に立つ健脚組



登りに時間を取られ過ぎた。下山時間を考慮し、頂上への登山は断念し、山を下った。



稜線を下る。登るのに比べるとずっと楽だが、足元は滑る岩のガレ場のため慎重に足を運んだ。



この先が急斜面のガレ場。慎重に下る。前面に太平洋と類似（さまに）の町が見える。



この岩がカンラン岩。地下のマントルから押し出され露出している。蛇紋岩に似ていると思ったが公式サイトでは否定していた。



擦れて表面がつるつるとなった岩。滑りやすい。普段鍛えていない筋肉を使うため足がひきつる人も。



アポイ岳の高山植物いろいろ

国の特別天然記念物に指定されている高山植物を5合目から上で見かけた。アポイ岳の標高は810mと低いが、約80種とされる高山植物が生育するという。その内20種は固有種とされ、アポイやヒダカの名前が付く高山植物はここでしかみられないものとか。この時期は春と夏の端境期の植物を見た。



イブキジャコウ

葉を擦ってみるとよい匂いがした。



キンロバイ

6合目より上のガレ場で多く見かけた。明るい黄色が人目を引きつける。



アポイハハコ（固有種）

6合目のガレ場で見かけた。全体に白色の綿毛が生えている。



アポイハハコ

白い花を咲かせていた。ここでないと見ることができない高山植物だ。



ヘビノボラズ

細かい棘があり、蛇も上らないことからこの名が付いたとか。



サマニオトギリ (固有種)

サマニは地元の地名「様似」。アポイに生える弟切草。



これは何の花？

サマニオトギリの近くで見かけた。



カワラマツバ

葉は松葉のように細い。多くは河原で見かける植物と解説してあった。



アポイマンテマ (固有種)

萼や茎は紫色だが、花弁は白い。咲くと白い花弁が目立つとか。

アポイ岳から厚真町まで 134 km。帰路、新冠のサラブレッド銀座に立寄った。



早朝にトイレストップで立寄った新冠町の道の駅。



新冠は名馬ハイセイコーの出身地。引退するのを惜しんで建てられた「さらばハイセイコー」の像が建つ。



海沿いの道を行くが、陸側の車窓には競走馬の放牧場を多く見かける。



放牧地では草を食む仔馬と母馬の姿をよく見かけた。心和む光景だ。



帰路、トイレ休憩で立寄った新冠（にかっぶ）サラブレッド銀座。



こんな奇妙な岩を沖合に見かけた。そうか！ここはジオパークに登録されている地だった。

源氏ホテルの乱舞に息を飲む（100年記念公園にて）



バスを降り、真っ暗闇の道を歩く。源氏ホテルの生育に成功した川辺（100年の森公園内）の森が近い。



目を閉じてあの光景を思い起こしてください。

第3日目（7月8日 火曜日）

厚真特産のハスカップの摘み取りとジャムづくり体験を行う。昼食はフランス印象派画家モネの名画『睡蓮』の世界を思わせる大沼野営地で。北海道の食材がいろいろと詰まったお弁当も忘れられない。



- ・ 08:00 宿舎出発
- ・ 08:10 土居農園でハスカップ狩り体験（1時間）
- ・ 09:30 公民館に移動、ハスカップジャムづくり（1.5時間）
- ・ 11:30 大沼野営地にて昼食
- ・ 13:00 吉岡農園で野菜収穫体験（1時間）
- ・ 15:30 新千歳空港到着、解散



ハスカップの摘み取り畑にて。こぶしの湯の近くの土居農園で体験した。



ハスカップの実。ブルーベリーの実に似ている。こちらの方が細長い。



ハスカップの畑。初めて見るハスカップである。タイミング良く、この3週間で収穫シーズンであった。



若い農園主の土居元氏。隣は厚真町職員で観光協会の仕事も兼務される小山氏。



今が旬の厚真町のハスカップ。7軒の農家が栽培しているとか。生では保存が難しいので幻の実とされる。



300gの実を30分かけて収穫した。熟れた実は触るとぼろりと落ちた。



それぞれの木には個性がある。木によって味が違うという説明を聞き、試食しながら摘み取ることに…。



筆者もしばしば試食したが、これは北海道の野生の味だ。



摘み取りを終えて品評会。ジャムづくり会場に持ち運ぶ。



ハスカップフェア開催中の厚真町。ハスカップという名前はアイヌ語由来とか。



公民館に場所を移し、インストラクターの指導で、摘み取ったハスカップをジャムにする。



まず、水でハスカップの実を洗浄する。



シニアはこういう共同作業では手際が良い。



短時間で出来るので持ち帰れる。



ジャム作り作業中



砂糖を入れて煮る



どうだろうか！



煮詰めたジャムを瓶に詰める



手作りハスカップジャムが出来上がる。一人2個持ち帰れる。



瓶詰も終わり、ハスカップジャムが完成。記念にハイ！ポーズ



昼食会場。この風景はまるでモネの名画の世界だ。小山氏の粋な計らいに感謝。



大沼の水蓮を背景にポーズをとる。



どうですか！モネの絵のような「水蓮と午睡」の光景でしょう。



北海道らしい弁当を！ 幹事の飯田耕一氏が交渉を重ねたまるごと北海道弁当。北海道の食材が満載だ。



吉岡農園での野菜収穫体験



買った野菜は宅配便で送る人も

知らなかった厚真

実のところ筆者は「厚真」についてはその名すら知らず、地図を見せてもらって道央にある町と初めて知ったものである。苫小牧の隣にあり、近くに温泉で名を知られた登別や観光地の支笏、洞爺湖がある程度の知識しか出発前は持っていなかった。現地で配布された資料で、この地方は胆振（いぶり）という古くからの呼び方があり、1万5千年前から350年前の遺構・遺物が発見されているということを知った。北海道のイメージを変える情報だった。それほど人が住みやすい地であったのだ。そんな厚真の魅力を知ってもらおうと豊かな自然や特色ある農業の現場だけでなく、分譲地の現場まで案内された。アポイ岳についても同様で、ジオパークに登録された地というからシニア自然大学に学ぶ者にとっては興味ある地であった。

厚真町の特産物



さくら米

厚真地区の高品質ブランド米。食べてとても美味しい味だった。



あづまジンギスカン

秘伝タレに漬け込んだ風味豊かなジンギスカン肉は、柔らかい食感が特色。



ハスカップジャム

不老長寿の実とされ昔から北海道の人が好んで食味していたハスカップ。小瓶のジャムでも結構な値段がついていた。

*この体験記に掲載されている写真は、厚真町観光大使後藤秀美氏、千葉シニア自然学校事務局北原道郎氏、同浅井信氏から提供されたものです。

(文責 千葉自然学校 浅井 信)